

## 東京工芸大学第3回「私立大学研究ブランディング事業」外部評価委員会開催報告書

日時：2019（平成31）年3月26日（火）18:00～19:40

場所：レンブラントホテル厚木 3階 三峰  
（神奈川県厚木市中町二丁目13番1号）

### 出席者

#### （1）外部評価委員（出席者）氏名五十音順

岡田幸勝氏 株式会社光学技研 代表取締役  
永松由次氏 厚木市立小鮎中学校 校長  
面谷信氏 一般社団法人日本画像学会 会長  
島田文生氏 公益財団法人コニカミノルタ科学技術振興財団 常務理事  
高橋晋也氏 一般社団法人日本色彩学会 会長  
時末誠氏 厚木市立小鮎小学校 校長  
中島淳一郎氏 神奈川県立厚木高等学校 総括教諭  
三矢輝章氏 株式会社リコー 研究開発本部A P T研究所 技師長

#### （2）学内関係者（出席者）

義江学長、野口色の国際科学芸術研究センターセンター長・芸術学部教授、内田同センター副センター長・工学部教授、宮崎大学事務局長心得、山口教育研究支援課長、教育研究支援課職員2名（事務局）

### 議案（審議・協議・報告事項等）

#### 1. 挨拶及び配布資料の確認並びに前回議事録等の確認

学長の挨拶及び配布資料の確認があり、審議は大学側から資料の説明を行い、終了後質問を受ける形で行う旨の宣言があった。引き続き文部科学省からの「私立大学研究ブランディング事業の見直し及び説明会のご案内」が配布され、当該事業の期間見直しの説明がなされた。

補足として、当該事業は当初予定の5年間に1年足りない4年間となり、2020年で終了となるが、「東京工芸大学色の国際科学芸術研究センター」を中心とした研究は存続させるという表明があった。

教育研究支援課長より、新任委員の紹介と、2017年度第2回東京工芸大学「私立大学研究ブランディング事業」外部評価委員会（2018年3月29日開催）議事録の確認があった。

（議事録は事前のメール審議によって承認済み）

## 2. 審議事項

### 1) 2018（平成 30）年度実施状況報告及び評価の件

教育研究支援課長により以下の説明および補足があった。

#### ➤ 平成 28 年度私立大学研究ブランディング事業（申請関連）

〔年次計画〕

目標

- ① 「色の体験学習型教育システム」のコンテンツの拡張・充実
- ② 重点研究テーマの確実な実施
- ③ 国際ワークショップの開催

〔実施計画〕

- ① 色に関する工・芸共同研究の成果や他の研究機関による最新の研究成果をメディアアート的手段でわかりやすく楽しく伝えるコンテンツを制作し、「色の体験学習型教育システム」のコンテンツの拡張・充実をはかる。
- ② 過年度と同様な方法で研究テーマの進捗管理と評価を行っていく。
- ③ ロチェスター工科大学、中国文化大学、タイ王立チュラロンコン大学、東フィンランド大学等、工・芸にわたる色の研究に取り組んでいる海外の大学から研究者を招聘し、国際ワークショップを開催する。その開催案内を本学公式ホームページや関連学会のホームページに掲載するとともに、本学公式ソーシャルネットワーク（Facebook, Twitter, LINE, YouTube）、チラシ、ポスター等の手段によって幅広く社会に告知する。

#### ➤ 色の国際科学芸術研究センター関連規程

補足：説明させていただいた平成 30 年度の事業計画について、当委員会の最後で「評価表」を配付するので評価をいただきたい旨の依頼があった。

色の国際科学芸術研究センター長（以下、センター長）により以下の説明および補足があった。

- col. lab（カラボ）ギャラリー
- イベント関連
- ホームページ・SNS による広報活動

補足：○カラボギャラリーのアンケートに関し、「色といえば工芸大学」を選んでくれる割合を増やしていきたい。

○公式 HP、フェイスブック、ユーチューブを 2017 年に開設し、今年度は、ツイッターおよびインスタグラムを開設した。情報を挙げる回数を増やし、フォロワーを増やしていきたい。

学長により以下の説明および補足があった。

- 海外の大学との連携
- 全学研究支援委員会

補足：全学研究支援委員会の立ち位置に関しては、資料 1 の事業実施体制中の組織図を参照いただきたい。この委員会では、研究テーマの採否や大枠の予算内訳などを決定する。また、この図には後述の事業推進実行部会が記載されていないが、この部会は、採択後事業の実施を行うために不可欠なものとして発足したので申請段階では記載されていないものである。

色の国際科学芸術研究センター副センター長（以下、副センター長）により以下の説明および補足があった。

- ▶ 各研究プロジェクト進捗状況
- ▶ 第1回国際シンポジウム2019
- ▶ 「色の国際科学芸術研究センター」管理運営委員会

補足：記載の予算規模で公募を毎年行い、研究採否を決め、予算配分後研究を実施している。プロジェクトリーダーが一堂に会する管理運営委員会を3か月に1度開き進捗管理を行い、4回目は国際シンポジウムで使用した手元配布の予稿集をまとめることとした。その後、当該リーダーの自己点検に対し、ブランディング事業幹部で評価を行いA～Dの評価を行った。

センター長により以下の説明があった。

- ▶ 研究ブランディング事業推進実行部会
- ▶ メディア掲載記事・新聞広告

大学事務局長心得により以下の説明があり、外部評価委員から、特に課題があるといった意見はなく、その適切性を確認した。

- ▶ 大学の理念・目的及びポリシーと事業との適切性の確認について

## 2) 2019（平成31）年度事業計画について

副センター長により以下の説明および補足があった。

（資料12）今後の予定

補足：2019年度（最終年度）の研究の募集を現在行っているが、この「東京工芸大学色の国際科学芸術研究センター」を中心とした研究は、ブランディング事業終了後も継続予定なので、1年限りでなく、2年継続の研究の募集も行っているところである。

ブランディング事業の最終総括に関しては、事業終了後速やかにウェブサイト上に公表することになっている。それを文部科学省事業委員会で取組に対する成果等について議論の上、総括コメントを発表することになるので、2019年度時点での大学としての総括が必要になる。

以上で大学側からの報告が終了し、次の質疑、審議を行った。（主なものは以下のとおり）

- ① 委員「本事業は、4年で打ち切りになってしまったが、補助金がない中で事業の継続はできるのか」  
→ 法人理事会に働きかけ独自ブランド構築のために研究を継続させたい（学長）
- ② 委員「事業は5年で予定していたので、申請書の2019、2020を縮める予定ですか、2019にも国際ワークショップを行いますか」  
→ 国際ワークショップ（国際シンポジウム）を予定している。次年度は、事業計画書に記載している米ロチェスター大学を訪問する予定なので、彼らにも参加を願う。東京オリンピック・パラリンピックに向けても何らかのイベントを考えていきたい。（学長）

- ③ 委員「研究ブランディング事業期間が圧縮されてしまったが、事業を分割して科学研究費助成事業（科研費）等の助成を取っていくのか？」
- 事業を分割して科研費に応募するとは考えていないが、個々の研究テーマが科研費申請につながったものはある。カラボギャラリー展示などは、文化庁の別の補助金に応募を検討している。文部科学省は4年間終了時点での成果でいいと言っているのので、それをウェブサイトには公表する。当該事業の後継の補助金が用意されることはないのので、非常に高い評価を目指す意義は薄れてしまったが、できる限りブランド力向上を目指す。（学長）
- ④ 委員「研究テーマ執行状況を見ると、各研究者とも予算をオーバーしないように執行している。使用していない研究者の経費を他のブランディング構築に回すことはできるのか？」
- 研究費の執行状況を見ながら余りそうであれば、それを共通費（例えば国際シンポジウム経費等）に回すようにしている。その検討は事業推進実行部会で行い決めている。この研究ブランディング事業補助金は「経常費補助金・特別補助」のひとつであり、科研費とは性質が異なるものである。なお、すべての研究者には研究倫理の e-learning を実施し、不正がない研究を実践している。（学長）
- ⑤ 委員「事業推進実行部会6月の議事録では、ロボフェスは当該事業から切り離して考えるとなっているが、最終的には参加している。この参加は事業推進実行部会のアイデアから決めたのか？」
- 当初、当該事業とは切り離して考えていたが、今年度のロボフェスはパシフィコ横浜の広い会場で、2,000人規模ということだったので、カラボギャラリーの過去の作品を精選して展示して、高校生や子供たち、その親御さんたちに見ていただくことにした。ブランディング事業推進中を認知してもらうことが必要なことから、他のイベント（例えばわくわく Kougei ランド、厚木市地下フェス等）も、当初の予定にはなかったものの、事業推進実行部会で検討して参加することとした。（学長、センター長）
- ⑥ 委員「日本画像学会主催のでは視覚と画像の基礎講座が、本ブランディング事業の共催としてホームページに紹介されているが、画像学会から正式な手続きを得ているものなのか。画像学会としては手続きが済んでいるものはブランディングで有用に使用していただきたい。」
- 後日調べたところ、日本画像学会事務局長からの正式な依頼を受けて、本学の共催とし、本学の施設を提供して視覚と画像の基礎講座が実施されたことが確認された。（学長）
- ⑦ 委員「当該事業の研究テーマは多彩で数が多い。学会発表なども増大しているので、工芸大学はブランディング事業をうまく活用されている。」
- 今まで研究テーマはどちらかといえば工学系が多かったが、芸術系の研究テーマも増えており、科研費などの応募も10件程度と倍増している。そのうち2~3件はブランディング事業の研究がきっかけとなりそれを発展させて科研費申請につなげたものであった。この事業が進むことによって更なる増加が期待される。（学長、センター長）
- ⑧ 委員「当該事業は、「工芸大学でブランディング事業（色といえば工芸大学）をやっているよ」と知られていることが大切であると考えられるので、新入生にブランディング事業を知っているかと

のアンケートを取るのはいかがであろう？ブランディング事業をやっている大学だから入学したのかを聞くことも有用と思われるがいかがであろう？」

→教務課は、既にガイダンス資料を封筒詰めしてしまっているのので、この4月に行くことは困難であるが、今後はアンケートを取っていきたい。（学長）

- ⑨ 委員「入学者が（色といえば工芸大）というのをわかって入学してくることは望ましい。最近、メディアで工芸大学の名前を目にすることが多くなっているように感じている。受験者が増加しているのであれば、全国からの受験者が増えたというような資料があるとわかりやすい」  
→工学部、芸術学部ともに受験生を増やしている。ブランディング事業も寄与しているものと考え。受験生の増加が全国的なものかどうかは入試課に確認をする。（学長）

- ⑩ 委員「申請でも3年間は実績作り、4年目、5年目でブランディング構築の模様だったので、最終年度ではあるが、達成目標をはっきり書き加えたいのではないか？」  
→承知いたしました。（学長）

以上で質疑・審議を終了した。

教育研究支援課長から、外部評価委員に対し、これまでの説明・審議をもとに本事業に対する評価2019（平成30年度）について配布した「評価表」に記入・提出の依頼がなされた。

（※評価集計結果は別紙に記載）

全委員からの評価表の提出の後、最後に学長より閉式の挨拶がなされ、本委員会は終了となった。

以 上

2019(平成31)年4月2日

回答者:外部評価委員8名

## 平成30年度「私立大学研究ブランディング事業」外部評価委員会・評価集計結果

## ① 「色の体験学習型教育システム」のコンテンツの拡張・充実

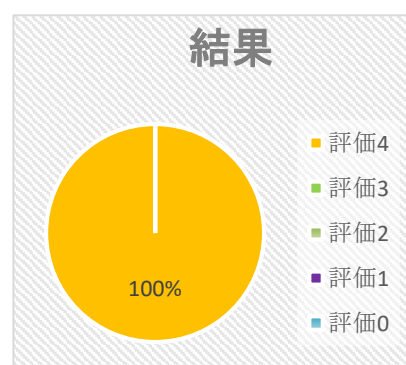
色に関する工・芸共同研究の成果や他の研究機関による最新の研究成果をメディアアート的手段でわかりやすく楽しく伝えるコンテンツを制作し、「色の体験学習型教育システム」のコンテンツの拡張・充実をはかる。

## 【目標達成の測定方法】

平成30年度までの工・芸共同研究の成果が全てコンテンツ化され一般公開されていること。

## ▽評価結果(8名回答/回答率100%)

評価4	十分行っている	8名
評価3	行っている	
評価2	十分ではないが行っている	
評価1	ほとんど行っていない	
評価0	全く行っていない	



## ② 重点研究テーマの確実な実施

過年度と同様な方法で研究テーマの進捗管理と評価を行っていく。

※色に関する工・芸共同研究の学内公募を行い、重点研究テーマを選定する。公募研究分野は「色と心理や感情」「色と教育」、「色と健康・医療・介護」、「色と文化財・芸術作品のデジタルアーカイブ保存」、「色とメディアアート」、「色と建築」、「光学素子、デバイス開発」とする。

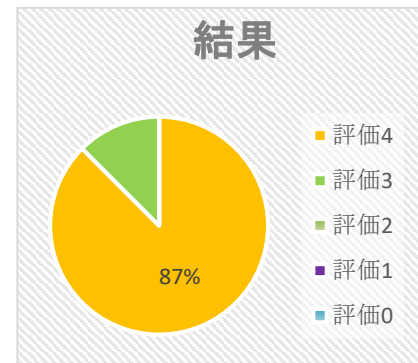
## 【目標達成の測定方法】

過年度と同様な方法で研究テーマの目標達成度を測定する。

※自己点検・評価部会が定めた、研究進捗度、論文数、作品発表数、ギャラリーへの来場者数、公開講座、国際ワークショップの開催件数・参加人数等の指標にて目標達成度を測定する。

▽評価結果(8名回答/回答率 100%)

評価 4	十分行っている	7名
評価 3	行っている	1名
評価 2	十分ではないが行っている	
評価 1	ほとんど行っていない	
評価 0	全く行っていない	



③ 国際ワークショップの開催

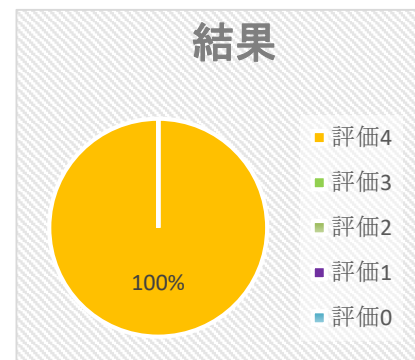
ロチェスター工科大学、中国文化大学、タイ王立チュラロンコン大学、東フィンランド大学等、工・芸にわたる色の研究に取り組んでいる海外の大学から研究者を招聘し、国際ワークショップを開催する。その開催案内を本学公式ホームページや関連学会のホームページに掲載するとともに、本学公式ソーシャルネットワーク(Facebook, Twitter, LINE, YouTube)、チラシ、ポスター等の手段によって幅広く社会に告知する。

[目標達成の測定方法]

少なくとも海外の大学2校が参加する国際ワークショップであること。100名以上の聴衆が集まること。

▽評価結果(8名回答/回答率 100%)

評価 4	十分行っている	8名
評価 3	行っている	
評価 2	十分ではないが行っている	
評価 1	ほとんど行っていない	
評価 0	全く行っていない	

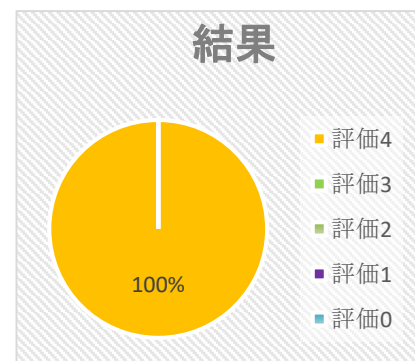


④ ブランディングへの取り組み (※追加目標)

工学部と芸術学部を擁する本学ならではの取り組みについて、積極的に情報発信を行う。

▽評価結果(8名回答/回答率 100%)

評価 4	十分行っている	8名
評価 3	行っている	
評価 2	十分ではないが行っている	
評価 1	ほとんど行っていない	
評価 0	全く行っていない	



**【本事業について、ご指摘・ご意見等ございましたら、ご記入ください】**

**6名記入**

- ① 意欲的に取り組まれており、素晴らしいと感じます。3年で支援が打ち切られてしまうのが残念です。本事業がブランドとしてどの程度学生に浸透しているのか、データを示していただきたかったです。
- ② 色に関する研究推進のドライビングフォース源として、本事業がうまく活用されていると感じました。
- ③ 大学の様々なイベントに地域の小中学生や大人の参加が少ないように感じます。学校へ案内が来た際には呼びかけをしていきたいと思いますが、地域の回覧等の活用もあるといいと思います。
- ④ 多メディアによる情報発信の充実ぶりには敬服します。文部科学省を驚かすような最終年度の成果を期待しています。
- ⑤ 学生の参画、行動目標から達成目標への切り替えを考慮されてはいかがかと思います。
- ⑥ 今後、AIと画像、AIと色、というようなテーマが増えることを期待しています。

以上